

サン・ファン館の再開館

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の影響によって約 2 年 8 カ月のあいだ営業を中止していたサン・ファン館が 2013 年 11 月 3 日に再開館いたしました。

2013 年の秋にサン・ファン・バウティスタ号が日本を出港してから 400 周年の節目となることもあり、サン・ファン館が再開館したことは石巻の観光関係者にとってもとても喜ばしいことです。

サン・ファン号は先人の偉大な歴史を次の世代へと伝えるという理由で、また、使節のシンボルであるということから県民が復元のために行った運動がきっかけとなり復元の話が上がり、サン・ファン館とともに作られたものです。

現在、サン・ファン館では、慶長遣欧使節船 400 年記念の「第 5 回サン・ファン絵画コンクール」の作品を募集しています。このコンクールは石巻地域の小学生を対象としたコンクールで伊達正宗、支倉常長、メキシコ・スペイン・イタリアといったサン・ファン号と慶長遣欧使節に関わりのあるものをテーマとして開催されています。

このコンクールは小学生たちに伊達正宗公の命を受け、海を渡った支倉常長ら慶長遣欧使節の志が、現代そして未来へと受け継がれていくという願いが込められています。

応募作品は、宮城県慶長使節船ミュージアムに展示が予定されています。表彰もあり各部門ごとに特選、準特選、入賞の表彰があり、応募者には全員に記念品が贈られます。



船内見学も再開。

サン・ファン館にはほかにも体験し学ぶことのできるコーナーがあります。常長とサン・ファン・バウティスタ号に乗り航海を疑似体験することができるコーナーや、使節の足跡を、リアルな動きのロボットや、パネルなどを使うことによってわかりやすく紹介してくれる慶長使節展示室などです。

東日本大震災でドックは全壊し、サン・ファン・バウティスタ号のマストが折れるなどの被害も出ましたが、復元船を中心に修復の作業を進めた結果、修復を完了することができました。また 12 月中には、復元船にイルミネーションを飾ったサン・ファン・イルミネーションツリーが展示されました。

サン・ファン館には見るだけではなく触れたり、体験できるコーナーが多くあり、遊ぶだけではなく、学ぶこともできます。サン・ファン館が再開館は石巻の復興に大きく貢献すると私は思います。

サン・ファン館に多くの人が訪れ支倉常長らの志が受け継がれていってもらいたいです。

(涌井翔太)

「萬画の国」の復興

石巻市は「萬画の国」をスローガンに掲げています。石巻マンガロードという石巻駅から石ノ森萬画館への道のりは、石ノ森作品のキャラクターとモニュメント、石造りのベンチが置かれています。

石ノ森章太郎の作品の多くは、子供から大人まで楽しめるアニメになっています。それは石巻だけでなく、日本中で知られています。サイボーグ 009 や仮面ライダーなどを手掛けた石ノ森章太郎記念館として作られた石ノ森萬画館は、石巻や宮城を代表しており、我々が誇れるものだと思います。

たくさんの人から支持のある、石ノ森章太郎のアニメは石巻と J R との共同事業によって、宮城県を走る仙石線で石ノ森作品のキャラクターが描かれたラッピング車両「マンガタンライナー」が運行されています。

このように宮城では、石ノ森章太郎の作品を身近に感じることができます。また、このような作品が多くの人を引き付けることにより、宮城県全体が宮城や東北の復興を少しずつ目指していけばいいと思います。

この石ノ森章太郎の萬画館は 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の津波で建物や配電線が損傷し、建物の 1 階が瓦礫やヘドロに埋まる被害に見舞われました。が、長期休館や修繕工事などを乗り越えたのち、2012 年 11 月 17 日に再開されました。

再び石巻に石ノ森萬画館が戻ってきたことで、石巻は「萬画の国」再建を目指して進んでいくのだと思います。

また、そんな萬画の街だけでなく、歴史のある石巻に宮城でない方でも、是非観光をしに来ていただける街にこれからなっていかなければならないと思います。そして、もう一度行きたいなと思っていただけるような街づくりを街全体で取り組んでいきたいと思っています。

この歴史のたくさんある、「萬画の国」観光への取り組みが石巻復興に少しでも向かっていけるものであると思っています。

(三國翼)

水産からの石巻復興

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた石巻魚市場に、新施設ができることになりました。10月16日に安全祈願祭が行われました。着工後、26年度に一部で供用を開始するそうです。水揚げを停止しないように工事をすすめており、27年の春に完成を目指していると報道されています。

石巻と言えば、魚や貝など多くの魚介類の水揚げ港として有名ですが、震災後で被害を受け漁に出られなかった時期がありました。

新石巻魚市場ができれば多くの人が喜び、また石巻の美味しい魚がまたたくさん食べられます。

そしてこの新施設には魚介類の直販や子ども達の水産学習、高層化による津波避難ビル機能などができるそうです。津波の経験を経て、魚市場にも新しい機能が加わるのです。

僕は、石巻の美味しい魚が好きなので、これから新石巻魚市場ができて美味しい魚がたくさん食べられるのが楽しみです。

もうひとつ、魚介類の話題があります。

2013年12月、石巻漫画館の近くに牡蠣小屋ができました。これまで渡波地区で「かき小屋渡波」を営んできた寺岡さんが、市内建設会社などの支援を受けて運営を始めたそうです。寺岡さんは名古屋からボランティアでやってきた方だそうです。

石巻市は宮城県の中で牡蠣生産高がもっとも多く、生で流通する量としては全国的にも、おそらく世界的にも有数の生産地です。水産からの石巻復興も進んでいます。

これからもっと多くの魚などを食べれると思うと楽しみです。

(鈴木成仁)

震災から1000日、石巻で追悼の灯火

12月5日、東日本大震災から1000日を迎えた石巻で地元有志やボランティアらが、約3000個の灯籠やキャンドルを灯し、犠牲となった人々に祈りを捧げました。

主催は、「震災1000日追悼の灯り」実行委員会、会場は同市門脇町の黒澤配管工業の敷地に立つ、「がんばろう！石巻」の看板周辺でした。

「がんばろう！石巻」の看板は、同社社長で今回の実行委員長でもある、黒澤健一さんの店舗兼住宅があった場所に、震災から1ヶ月に黒澤さんが仲間と一緒に立て、石巻復興のシンボルとして様々な人が訪れる場所になりました。

この日灯された灯りは市内で亡くなった人の数と同じ、3262本の数にこだわるというよりは、亡くなった人への思いを共有するために本数を用意したそうです。私は、多数の灯りをともしたことは、亡くなったかたを忘れないためにもとても素晴らしいことだと思います。

まだ復興の途中ですが、まちは少しずつ前に進みつつあると思います。あの震災で傷付いた人が少しでも早く笑顔になれるように、私も復興のために支援できることをしていきたいと思います。

(鈴木成仁)

中瀬に「輝く人」

石巻市中心を流れる旧北上川河口の小さな島、中瀬に「輝く人」が現れました。石ノ森萬画館の横のスペースです。萬画館と並び立つ、石巻で活発なアートの新しい象徴のように思えます。

この像はパイプとステンレス製で、一見作品は隙間だらけなのに、8.9メートルにもなるという巨人の像が、冬の強い風の中でもしっかりと立っているのが不思議です。昼間見ると、無機質な銀色の光を放っています。夜は内部の発光ダイオードで様々に彩られます。

作品は芸術文化の祭典「神戸ビエンナーレ2013」の神戸港・海上アートコンペティションで審査員特別賞に「輝き」ました。2013年10月から2ヶ月間、神戸に展示してあったそうです。作品は一度分解してトラックで運ばれ、クレーンを使い2日で組み立てられました。

製作者は金属造形作家で東京都世田谷区在住の伊藤嘉英さん(44)です。伊藤さんは石巻市出身で、幼稚園から高校3年生まで、市内のアトリエ・コパン美術研究所に通っていました。作品は石巻の復興への祈りを込めて作られており、神戸に展示してある時から石巻を向いて設置されていたとのこと。

点灯式には、市民有志らで組織し、移設に尽力した「アートプロジェクト・石巻」の関係者らが出席しました。アトリエ・コパンの新妻健悦代表夫妻はもちろん、亀山紘石巻市長や浅野亨商工会議所会頭、後藤宗徳社団法人石巻観光協会会長、三国清美石巻高校校長の姿もありました。「アートプロジェクト」の阿部和夫委員長は石巻市の教育長を長年務めた方であり、その人脈と人望をうかがわせるものでした。

引き取り手がなければ廃棄されるしかなかったというこの作品の移設に尽力した関係者の努力に、敬意を表したいと思います。

ただ、この展示は3月までとなっています。現在の敷地は石巻市のものであり、永続的な使用はできないそうです。関係者の話では、次の敷地を探さねばならない状態だそうです。現在の位置はよく目立つだけに、移転されるのが残念です。願わくば、次の展示場もよく目立つ所になるといいなと思っています。

それでも、このプロジェクトから、石巻の復興を祈る芸術家と復興のために尽力する方の存在がわかりました。そのことを思うと、力が湧いてくる感じがします。

(丸岡泰)

